【論文】

超現実主義から共産主義へ
―― 安部公房「シュールリアリズム批判」について ―

斎藤朋誉

i

安部公房は、シュルレアリスム作家である。これが一般的にイメージされている安部公房像だろう。シュルレアリスムという、親しみやすいとはあまりいえない芸術運動・思想を小説などに応用したという点に特異性を見ることができる。そこで、先行研究に目をやると、生田耕作氏は、「シュルレアリスムと安部公房」において、シュルレアリスムが直接的に登場する短編「バベルの塔の狸」を取り上げ、「散見する誤訳づくめの翻訳作品によって…(中略)…安部公房のシュルレアリスム理解はいささか促成栽培式に形成された」と論じている。作品においては「シュルレアリスム、とりわけアンドレ・ブルトンの理念に対する皮相な誤解と、両者のあいだの体質的違和感が歴然と認められ…(中略)…『バベルの塔の狸』は日本の誤訳文化の副産物である」とまで言っている。(※1)安部公房のシュルレアリスムは、アンドレ・ブルトンが提唱し、ヨーロッパを中心に広まったアヴァンギャルド芸術運動としてのシュルレアリスムとは異なった形であるという見解が先行研究における共通理解のようである。だが、翻訳の質や当時の社会状況だけを根拠にしたこれらの研究は、いささか安易ではないだろうか。

当時出版されていたシュルレアリスム思想に関する文献としては、瀧口修造のエッセイ集『近代芸術』(※2)が有名であるが、内容を見ても現代と比べてその思想理解に大きな誤解を認めることはできない。また、当時の日本シュルレアリスムの中心的人物であった山中散生の編集によって一九三六年(昭和十一)にボン書店から出版された『L'echange Surrealiste』では、山中散生の「シュルレアリスム思想の国際化―後記に代へて―」中に、「この〈L'echange Surrealiste〉については、既に昨春計画を樹て、当時ブルトンとエリュアール両氏に種々相談の結果、斯くの如き内容を得るに至ったが、今後シュルレアリスム思想の国際的交流を図る上に於て、極めて重要な出発

点であると観て、僕としても非常に満足を感ずるものである。ここに集録された作品の内ブルトンの「文化擁護の講演」のみは〈La Bete Noire〉誌上より転載翻訳させて貰ったが、その他は全部ブルトンとエリュアールの協力によって直接各作家並に画家により送られてきた書卸し並に未発表の近作である」などとある。文面を見る限りでも、アンドレ・ブルトンなどの大家と直接的な交流が頻繁に行われていたことが分かるだろう。果たして充分な思想理解のなされていない状況で、このような大家たちとの直接的な交流が可能だろうか。やはり翻訳の出来の如何や当時の社会状況だけではなく、現存する当時のテキストを読解し、内容の面で一致不一致を判断すべきであろう。

ii

シュルレアリスム思想の正確な理解というものは本来的に困難なものである。また、そのような理解自体が存在すると明言できるようなものではない。例えば、アンドレ・ブルトンによるシュルレアリスムを展開していく上での共産主義への接近が挙げられる。これは一九二四年の『シュルレアリスム宣言』と一九三〇年の『シュルレアリスム第二宣言』との間に起きた大きな変化だと言える。シュルレアリスムという芸術における革命的な思想と、共産主義という階級社会における革命的な思想という共通点から、自ずと接近したという標語的な主張を見ることはできるが、シュルレアリスムと共産主義では本質的に異なる部分が存在することは認めざるを得ない事実である。この変化についてブルトンは、「すなわちそれは正常にバークレーとヒュームとを通ってヘーゲルへきたように、ヘーゲルを通って正常にマルクスへきたのであります。」(※3)と主張している。ブルトンの著作からこのような主張は多く見られるが、その正常な接近の論理的説明を見ることはできない。どのような正常性によって共産主義に接近したのかがブルトン自身でも明確に分析できていないようにも思える。もし、シュルレアリスムが本質的に共産主義と近似したものを持っているとするならば、ヨーロッパシュルレアリストと同様に、日本のシュルレアリストも自ずと共産主義に傾倒していったはずだろう。だが、そのような事実は日本シュルレアリスムには存在しない。

その日本のシュルレアリスム事情の中で、特異な位置を占めるのが安部公房というシュルレアリストである。西脇順三郎や滝口修造、山中散生など日本を代表するシュルレアリストが共産主義に接近することなくそれぞれのシュルレアリスムを進める中、安部だけが共産主義に強く接近している。その当時を回想して安部は、「ぼくはまったく非政治的に共産党に接近したわけだな、それは完全に文学理論としてのみ、つまりぼく自身の中のシュールリアリズムの考え方の展開としてのみの共産主義だった」と語っている。(※4)安部は、ヨーロッパシュルレアリスムに見られる一般的・標語的な共産主義への接近とは全く異なる論理性を持って、独自に共産主義へと接近したのだろう。むしろ、その接近の論理は、ブルトン自身でも不明瞭であったと思われる正当性に共通する何かを持っていたのではないだろうか。しかし、この回想だけでは、その接近がどのような理論をもってなされたのかは明確にはできない。

シュルレアリスムのみを理解するだけでも、困難を極める作業であることは間違いない。容易に結論を出せるような内容ではないが、本論文では現在流布している専門書や翻訳書が、現代における正確なシュルレアリスム理解であると定義した上で、それらの文献を元に、当時の安部公房がシュルレアリスムをどのように捉えていたのかを再確認する必要があると考える。そして、安部公房が如何にしてシュルレアリスムを作品に摂り込んでいたのか、安部公房作品を解釈するための新たな一材料となるような実証を試みたい。

iii

「シュールリアリズム批判」というエッセイが一九四九年（昭和二四）、『みづゑ』という美術専門誌に掲載されている。（※5）「シュールリアリズム批判」は、一般的に安部公房のシュルレアリスムを用いての最初の作品であるとされる「デンドロカカリヤ」、また、その前衛性への評価から第二五回芥川賞を受賞した「壁―S・カルマ氏の犯罪」と同時期に書かれたものであり、直接的にシュルレアリスム思想の理論について言及しているという点で、安部作品の思想の背景を探る上で重要な資料であると言える。（※6）そのため、このエッセイ「シュールリアリズム批判」を単独で論じる必要があるものと考える。

「シュールリアリズム批判」は、序の後に、第一節「現実認識」、第二節「非合理」、第三節「プシコノイローゼ」、第四節「意識の検閲」、第五節「表現方法」、第六節「デフォルマシォン」、第七節「デモーニッシュなもの」という七つの節から構成されるエッセイで、安部公房のシュルレアリスム批判というテーマで独自のシュルレアリスム絵画論が展開されるのである。シュルレアリスムが、戦後社会において大きな影響を与えうる位置を占めるようになった必然的契機を精神構造の分析において捉え、その必然性から幾つかの問題を提示し、考察・批判するという内容になっている。

現実認識の節において、安部は「言うまでもなく、すべての芸術がある意味での現実認識であることには相違ないが、シュールリアリズムの特徴は現実認識そのものをテーマとして取上げたところにあり、従ってそれは現実を否定すると同時に再構成しようとした革命の理論である。すなわち単なる現実認識というより、現実の解釈であり、また単に新しい感動形式のための表現方法というより、新しい現実認識から必然的に要求された表現方法であった。」と述べている。実際のシュルレアリスム思想の主題としても、この考え方は誤りではない。シュルレアリスムとは元々、西欧世界の技術・精神・歴史などによって多大な戦禍をもたらした第一次世界大戦を経て、その全てを否定しようとしたダダイズムの流行した後に頭角を現した芸術運動である。シュルレアリスムは全ての芸術に共通する、如何に「現実認識」するかという主題ではなく、「現実認識」そのものを如何に捉えるか、現実を如何に解釈するかという主題を掲げる点に特徴があると言えるだろう。通常では認識不可能な、現実の中に存在する真の現実こそが超現実であり、その超現実の認識を試みる芸術運動がシュルレアリスム（超現実主義）なのである。この「現実」そのものを如何に捉えるかを、「≪意識

―無意識≫」という精神構造からの分析の形式をとって、安部公房のシュルレアリスム論は展開されていく。

iv

その現実の解釈・現実認識の方法は二通り存在し、一つはサルバドール・ダリに代表される「現実の非合理面を合理的に表現しようとする立場」と、もう一つはアンドレ・ブルトンの自動記述に代表される「表現をも非合理的に表現しようとする立場」である。その中でも安部は、ダリの現実解釈に大きく価値を見出している。どちらも共通するのは非合理を表現するという点で、そのことは非合理の節の「こうして原始芸術や狂人の作品に接して禁じ得なかった驚くべき感動の理由を論理的に捉えようとしたわけであるが、それはただ珍奇であるという偶然の選択のためだけであっただろうか、それとも何か必然的なわけがあったのだろうか。シュールリアリスト達は正に直観的にその必然性を感得したのであった」という部分から読み取ることができる。ダリはその表現のために、「パラノイア的批判活動」を展開し、精神自動性症候群患者の意識や意志の統制を離れた精神現象、または、それに伴う幻聴や幻覚の体験を客観的・能動的に表現することで、シュルレアリスムに新たな可能性を切り開いたのである。ブルトン、ダリ両者ともに非合理世界に客観的見解を持ち、そこに新たな現実認識の表現方法が存在するとした点でダダイズムと区別できるが、能動性を持ったダリのパラノイア的批判活動に更なるシュルレアリスムの可能性がある、とするのが安部の評価だろう。

安部は、パラノイアとは「字義のごとく寄生的理性を意味し、一個の病というよりはクレランボウによって纏められた精神自動性症候群と考えられるべき」ものであり「精神現象でありながら意志の統制を受けず、あたかも寄生虫のごとく精神の中に巣喰う自動精神」のことを指す、と解説している。また、その原因として、「それは意識の検閲をすり抜けて種々の妄想を形成する。これは要するに意識層に何らかの障碍（器質的あるいは機能的な）が起きて、生物進化上人間の中枢神経系に宗族発生的に固着した、宗族心理作用ともいうべきものの露呈である」としている。この説は、実際にクレランボー独自のものとして存在するものである。そして、現在でもクレランボー症候群とも呼ばれ、大胆な器質論にその特徴を見ることができる。パラノイアの原因を器質論的、機械論的、脳病理学的に解釈する学説は今日、忠実な弟子以外には認められてはいないが、当時では信頼できる説として一般的に認識されていたようだ。

エッセイのこのような展開からは、シュルレアリスムの精神自動が、本能的、無意識的な人間の心理を表現するための方法として用いられ、それによって「原始芸術・狂人の作品等」に見出されるような非合理の世界を表現し、新たな現実の解釈を試みたのだ、という安部が精神自動・無意識・原始芸術・狂人の作品・非合理・現実認識に「必然性」を持った関係を見出していることが分かる。

そして、無意識・本能を能動的に表現することにシュルレアリスムの意義を見出す安部は、そこから、シュルレアリストと狂人を区別する必要があると主張し、狂人的であるパラノイア

に対して「プシコノイローゼ」を取り上げる。プシコノイローゼ（神経症症候群）は、「大別してヒステリーと神経質とに分類される症候群であり、疾患というよりは三浦岱栄博士の主張のごとく、まさに《一個の世界》であると考えられ、更にすべての人間に現れうる外界刺激に対する一反応現象、あるいは反応する人間の傾向であると考えるのが最近の学説である。」と解説する。三浦岱栄博士は、日本を代表する精神神経医学研究者の一人である。その三浦岱栄氏の『神経病診断治療学』に目を通すと、「精神神経症は一つの疾患といふより、**一個の世界**であると思ふ。それは神経症なる反応を示す人間の型なのである。」など、エッセイと一致する多くの解説があり、安部が実際に『神経病診断治療学』から引用したということが断定できる。（※7）

通常、「意識は無意識の作用を検閲し、その表出された質が無害であるときにだけ」表出を許し、そうでない場合、つまり有害であると判断された場合には、それを「変質あるいは抑圧」する。そして、「意識と、絶えずその監視検閲を受けている無意識との矛盾、内的軋轢」の「反射」がプシコノイローゼなのである。以上がエッセイ中でのプシコノイローゼを定義している部分の概略となる。現代における解説を見ても、器質的又は機能的な障害から発症するものではなく、安部が把握している三浦岱栄博士の定義と同様、精神のアンバランスが原因となる疾病として分類されている。そのため、時代的な意味の差異は認められない。

以上、論述してきたパラノイアとプシコノイローゼの関係を纏めると、安部はパラノイアを、器質的障害を原因とするある種選民主義的な狂人的なもの、また、プシコノイローゼを、器質的障害を原因としない全ての人間に現われうる民衆的なものであると認識し、その二つを対極に位置する現象であるとしている。この、ある種の選民主義的なパラノイアと、誰にでも起こり得る民衆的なプシコノイローゼの対立からは、安部の階級問題への話題移行という意図を明確に読み取ることができる。この階級問題への展開に、シュルレアリスムから共産主義へと接近した、安部の必然性を明らかにするために手掛かりを見出せるのではないだろうか。

V

安部はここから更にパヴロフの大脳整理学の理論を持ち出し、

意識はパヴロフの皮質第二系に相当するものであり、言語による相互の交通と道具による外界への働きかけによって、第一系の上に更に形成された直接反射の一般化、すなわち《抽象》作用をなす系であるため、社会性の系である。社会の成立は第二系の形成と同時であったと考えられる。また抽象化とは一つの即物的態度である故、あらゆる事物はこの系に関わりを持ち、またパウル・テイリッヒの言うごとく《たとえ個人が救われたという意識を持っていても、歴史と歴史の上に於てなされるべき具体的決断に対する責任からは免除され得ない》以上、すべての社会的現実はこの系に責任を要求してくるのである。ところで第二系と第

一系、すなわち意識と無意識界とは無関係に成立したのではない。始めは外界に対して極めて合理的な筈であった。しかし、社会的現実は常にその関係に対して合理性を保つように動いていきはしなかった。神経の型による個人差を超えた抵抗（内的軋轢）が現われてくることがあった。大多数の人間（民衆）がその抵抗を共通の社会的現実として受取らざるを得ない時があった。自律的経済である資本主義の下にある民衆の社会的現実のごとく。そして、その意識と無意識とのアンバランスが、我々を取りまく様々な現象なのである。抑圧階級の圧制が意識では検閲し切れないほどの刺激を無意識界に与えた場合、バランスはついに破れる。精神深層作用は露呈あるいは爆発せざるを得ない。（※8）

と、無意識・本能である第一系と意識・社会である第二系との関係を、民衆と抑圧階級との関係に置き換えている。第一系や第二系の解説は、フローロフの『パヴロフ及其学派』によれば、

第一のものは既に述べた皮疾下中枢、即ち皮質の最も近くにある神経核のなす系である。これは、複雑な無条件反射、即ち本能、の存在する領域である。

…（中略）…

この第一の系の上に、それを基礎として第二のものがある。即ち、条件反射、または一時的反射の形成される中枢である。既に述べたところで明らかであるが、この系は全大脳両半球の灰白質の広大な層にあり、個体の広い指南力のあるところであり、受容器又は凡ての感覚器の活動を通して、個体を外界のすべての現象に結びつける所である。これが達成されるに極めて都合のよいことには、これに属する反射は、非常な易動性を有し、必要に応じて形成もされ、又は破壊もされる。だから不断に変化しつつある外界の条件に適応し、その中で自由に動作する能力を動物が持つことが出来るのである。

…（中略）…

だがさて、人間の場合には、脳の発達は言語によるお互ひの交通と、労働用具の把握によって外界に働きかけること、との二つのことのために、もう一つの生理学的上部構造が現はれて来た。それは直接の投射活動を一般化すること、即ち第二系を基礎として、その上に更に一つの機能が出来た。それは直接の投射活動を一般化すること、即ち抽象能力と言ふ、更にずっとあとで出来て来た能力の物質的本体としての役目をする、臓器となったのである。

パヴロフはこの第三の系（皮質下の系を除けば第二の系）即ち個体と外界との相互の関係を定立する系は、主として大脳両半球の前額部皮質に位置してゐるとなした。大脳半球の前額部がよく発達してゐるのは人間だけだといふ周知の事項に、そのことはよく呼応している。（※9）

とあり、皮質第一系は無条件反射、つまり本能・無意識の領域であり、また（皮質下の系を除いた場合の）皮質第二系は本能・無意識を一般化、換言すれば抽象化する領域であることを論じ

ている。それは、「個体と外界との相互の関係を定立する」ということを意味しており、本能・無意識を元にして社会・意識が相互関係的に築かれたということになる。つまり、安部がエッセイ中で「社会の成立は第二系の形成と同時であったと考えられる」と解釈する論理も肯けるのである。また、パヴロフはこの社会を成立させた系は、主に大脳両半球の前額部皮質に位置するとしている。大脳両半球前額部皮質の著しい発達は、人間以外の動物には見られない人間特有の機能であるために、社会性という機能が人間と人間以外の動物を区別する指標となっているという当時の認識を、フローロフの引用後半部分から読み取ることができるだろう。

当時、パヴロフによる大脳生理学は言語の新たな可能性を探り得る学問として注目されていた。当時出版されていたパヴロフの書籍は、昭和十二年初版の『条件反射学：大脳両半球の働きに就ての講義』（以下『条件反射学』）と、再版本だけとなる。パヴロフの書籍は現代に至っても、『条件反射学』と『パヴロフ選集』上下巻の二種のみである。その当時の、パヴロフの翻訳者としては林髞氏を挙げることができる。林氏については元「現在の会」、「記録芸術の会」会員である柾木恭介氏の「木々高太郎という探偵小説を書く人がいたんですが、彼の本名が林髞といって、彼がパヴロフを日本に紹介したんです。」という証言からも分かる。（※１０）当時のパヴロフに関連する文筆家として、柾木氏の証言で名前が挙がった林氏しか存在しないという事実は、安部の大脳生理学の理解が当時代性を持ったものだということの証明となるだろう。林氏による生理学関連の著作や翻訳は多数見ることができるが、その内容はパヴロフの『条件反射学』における理論の紹介、パヴロフの弟子たちの著作の訳本、又はそれに林氏の学説を加えた程度のものである。

だが、その関係を民衆・抑圧階級と照らし合わせたものは管見する限りでは存在しない。今までに挙げてきたものは全て科学的に根拠を持って実証されている当時代性を持った学説であったが、唐突に「抑圧階級」という異なった領域の用語が見られる点に、安部の特異性を見出すことができるだろう。引用部における「抑圧階級」前後の内容を見るに、資本主義社会から生じる矛盾とそれを打開するための革命、という共産主義的なシナリオを含んだ論述であると解釈できる。つまり、この解説部分は安部独自のシュルレアリスム思想であると考えられるのである。このようなエッセイ中の展開から、安部がシュルレアリスムから共産主義へと接近した軌跡を見ることができるだろう。

抑圧階級による圧政を受け続けることによって、民衆（被抑圧階級）が抱く非合理が意識の検閲では制御不可能なまでに高まり、無意識の深層作用を露呈又は爆発させてしまうという社会的現実に起こり得る現象は、プシコノイローゼにおける意識と無意識のアンバランスの構造と一致し、その現象は換言すれば革命ともなるだろう。ここで、プシコノイローゼ的に革命を起す被抑圧階級と、プシコノイローゼ的に創作を行うシュルレアリストを等式で結ぶことが可能となる。つまり、被抑圧階級がプシコノイローゼであるということは、被抑圧階級がシュルレアリストたり得るのである。それが安部にとってのシュルレ

アリスムの意義だったのだろう。安部は、自動精神から無意識・原始芸術・狂人の作品・非合理・現実認識へとそれぞれ関連付けることによって、シュルレアリストが創作において非合理を用いることの必然性を見出した。それと同様に、非合理・プシコノイローゼ・精神分析・大脳生理学という過程を経ることによって、矛盾を持ったシュルレアリスムから共産主義への接近に必然性を見出したのだろう。それゆえ、シュルレアリスムから共産主義へと接近した安部にとって、階級を発生させる資本主義と如何に対峙するかという問題は、立ち向かわざるを得ない大きな壁として厳然と存在していたことは間違いないと言えるのである。

vi

安部がパラノイアからプシコノイローゼへと話題を展開させる「その客観性に於てシュールリアリスト全部を狂人の群と考えるわけにはいかぬとすれば、当然フロイドによって展開されたプシコノイローゼ（精神神経症）がそうした問題の中から浮び上ってくるのではなかろうか。（むろん原始芸術などに見られるデモーニッシュなものを存在論的に追求する方向もあったが、それは後で略述する。）」というこの引用部からは、シュルレアリスト的なプシコノイローゼと並んで、「デモーニッシュなもの」がシュルレアリスム芸術を論じる上で重要な役割を担うものだと考えていることが分かる。この「シュールリアリズム批判」は、本文に「さて前にも述べたごとく、その論理的追求には存在論的追求と科学的追求とがあるが、それぞれを略述しながらシュールリアリズムの批判に代えよう。」ともあるように、シュルレアリスムを存在論的・科学的の二方向を以って論じられている。そして、その科学的追求が今まで論じてきたプシコノイローゼによるものであり、それと対をなす存在論的な追求こそが、この「デモーニッシュなもの」によるものとして設定されているのである。

そのため、ここからは「デモーニッシュなもの」に注目して考察を進める。デモーニッシュなものは、エッセイ中の節の一つであり、その他の節でも関連する文面を見ることができるため、この「シュールリアリズム批判」で大きな役割を担っている語の一つとして捉えて間違いはないだろう。では、デモーニッシュなものとは何か。先に挙げた引用部から読み取れるのは、そのデモーニッシュなものが「原始芸術など」に見られるということである。「原始芸術など」の示すものが、原始芸術や狂人の作品だということは「現実という言葉が幾様にも矛盾した意味に使用されたごとく、非合理も常に一定した意味で使われたわけではなかった。単に表現意欲を支える《あるもの》の象徴として使われることもあったし、形而上学的な超越の踏台にもなったし、ブルジョア社会攻撃の原動力ともなった。だがその何れもが表現方法として、あるいは手段として選んだ共通点、原始芸術・狂人の作品等との近似性から、それらすべての非合理の用法が一つの必然性として説明されてくるのである。」という記述から読み取れる。総じれて言えば、シュルレアリスムという現実の非合理面を表現する芸術は、原始芸術や狂人芸術と共通点を持ったものであり、その共通点としてデモーニッ

シュなものが挙げられる、ということになるだろう。

その「デモーニッシュなもの」とは、エッセイ中の言葉を用いれば「それ自身の根底に形態を破壊する働きをもったものであり、事物の存在根拠であり、実存の形式である」ということになる。また、「芸術が実存の直接的表現を目指すものである以上、芸術はデモーニッシュなものであり、創造と破壊、精神的なものと動物的なものという二重の弁証法を持っていなければならない。」とも解説されている。安部は、創造と破壊を同時に内包しているという二律背反的な性格をデモーニッシュなものの特徴として挙げ、同時にそのデモーニッシュなものを実存という言葉で置き換えている。そして、実存の表現とはつまり芸術であるという芸術観から、芸術はデモーニッシュなものでなくてはならないと主張する。

ここで、ある文献からの引用を見てみたい。

かういふ事実の中に於て何処に於ても見られるのは、あの古典以前の人類の芸術作品の中に於て見られるのと同じ緊張関係である。それは即ち一方では形式を造りつつ他方では形式を破壊する一要素を自分の中に含めてゐる所の包括的な様式であり、従ってそれは積極的なものに反抗するもの、云はば積極的な、換言すれば形式を創造する所の形式(Form-widrigkeie)である。

魔力的なものゝ中に於ては常に尚ほ神的なもの、即ち根拠と無根拠(奈落)との統一、形態と形態破壊との統一、が含まれてゐる。それ故に魔力的なものは実存を持つ事が出来る。

それ故に魔力的なものを叙述する際には、神話的な又芸術的な象徴によってする表現の仕方は、人間以下の世界に降下する事を好む。何となれば、そういう人間以下の世界の中に於ては、創造的であると同時に破壊的であると云う様な力を持った生ける諸勢力が、人間の持っている精神的形式によって阻止される事なく自由に表現されるからである。而も例えば、動物の如き形をした魔力的な働きをなす者の形態は、人間の形と或る関係を持ち、その形を通してそれは単なる動物的なものそのままの姿を超越せしめられる。かくして、此処でも又再び一つの独自の弁証法が成立する。即ち精神の中に於て破壊的な支配力を振う諸勢力は、精神以下の世界の中に於て直接可見的となる。魔力的なものを最も強く表現する絵は、動物的な姿で以って精神が歪められた絵である。何となれば、そういう絵は創造的なものと破壊的なもの、精神的なものと精神以下のもの、と云う此の二重の弁証法を其の中に含んでいるからである。

これは、パウル・ティリッヒの著作の中に見られる記述であるが、安部の「シュールリアリズム批判」中の論述と驚くべき内容の一致を見せている。「シュールリアリズム批判」中、パヴロフの大脳生理学の理論から階級問題を導き出した部分で、「またパウル・テイリッヒの言うごとく《たとえ個人が救われたという意識を持っていても、歴史と歴史の上に於てなされる

べき具体的決断に対する責任からは免除され得ない》以上、すべての社会的現実はこの系に責任を要求してくるのである。」と、安部はティリッヒの何らかの文献を典拠している文面が見られる。一九四四年に教文館から出版された菅円吉の翻訳によるパウル・ティリッヒ『カイロスとロゴス―歴史解釈の問題―』（以下『カイロスとロゴス』）に目を通すと、安部の引用と同一の文面を見ることができる。（※１１）この引用部は『カイロスとロゴス』中の「魔力的なもの」という編に見られるため、「シュールリアリズム批判」に見られるデモーニッシュなものと関係している可能性は非常に高い。そして、先に『カイロスとロゴス』からの引用を並べて比較したことから分かるように、安部の論じるデモーニッシュなものとティリッヒの論じる魔力的なものは非常に高い近似性を持った、直接的な引用と言っても過言ではない内容を示している。したがって、「シュールリアリズム批判」では、ティリッヒの『カイロスとロゴス』における魔力的なものを踏襲した上で、安部公房のデモーニッシュなものが論じられていたということが断定的となる。

パウル・ティリッヒは宗教社会主義を提唱した神学者として知られる人物である。そのため、共産主義との関わりが深く、加えて、実存主義者ハイデガーから大きく影響を受けている人物でもあるため、安部と共通点を多く有する人物であると考えられる。安部がティリッヒを知り得る必然性は十分にあっただろう。そして、そのティリッヒの代表的な用語として魔力的なものを挙げることができるのである。ティリッヒは『カイロスとロゴス』の「魔力的なもの」において、原始芸術に「現実の深底」が表現されているとし、その表現を導き出す潜在意識性に価値を見出している。そこには形態と、形態を破壊する形態を同時に内包する魔力的なものを見ることができる、また、形式を創造する事と形式を破壊する事との間の緊張関係の中から魔力的なものが発生する、という表現をしている。魔力的なものは、その中に形態を破壊する働きを持ち、その働きは形態そのものの根底から出て来るものである。部分的ではあるが、以上がティリッヒから読み取ることのできる魔力的なものの概略であり、安部の論じるデモーニッシュなものと差異は無いものと言えるだろう。（※１２）

vii

また、ティリッヒはデモーニッシュなものについて、「実践的な領域の中に於ても等しく魔力的な活動があつて、それらは意味に於て又象徴力に於て凡ゆる他のものを凌ぎ、而して我々の時代の特色ある展相をつくつてゐる。それは自律的経済即ち資本主義の魔力的活動である。」と、社会におけるデモーニッシュな活動として、資本主義社会を挙げる。そして、「自律的経済とは、技術が用立ててくれる所の助けをかりて、今迄に嘗て見ない成功的な仕方で物品を生産する事である。自由市場と云う仕掛は、需要と供給の平均に対して、又要求と要求の満足とを不断に増加して行く事に対して、我々の考え得る最も巧妙なる機械である。資本主義的経済機構は、魔力的なものが、本来持つてゐる所の、土台となつたり、創造したり、又改変したりする性質を最高の程度に於て持つてゐると云う事に就ては、

如何なる疑ひもあり得ない。同様に然し又、此の土台となる力は恐ろしい強さを持つた破壊力と結び付いてゐる。群衆の間に於て又個人に於て、かういふ破壊作用が精神的に(geistig)心理的に(seelisch)又身体的に(korperlich)起る事の描写は無数であり、又何としても否定出来ぬ強い印象力を持つてゐるので、此処でそれを再び繰り返す必要はない。」と論じ、資本主義社会によって齎された近代的量産化システムや、自由市場における需要と供給の関係に創造の形式を見出し、また逆に、その資本主義社会における下部構造に破壊の形式を見出している。下部構造とは、生産システムや市場状態などの生活様式から規定される経済機構を意味する。ここではその下部構造を土台と言う言葉を用いて表現しているのだろう。その下部構造を元に、上部構造である人間の意識が成立しているわけだが、そのために発生してくる問題は具体的に挙げれば限が無いというのは、ティリッヒの論じる通りである。だが、その資本主義社会である以上切り離せない問題というものを概して言うならば「階級問題」という表現が適切だろう。「魔力的なもの」から読み取れるティリッヒの資本主義社会に対する認識は、その経済機構の中に創造と破壊の形式を二律背反的に内包しているという程度のものであり、弁証法的唯物論の思想にまでは至っていない。だが同時に、これらを参考にした安部の資本主義に対する認識が、最低限、右で述べたティリッヒの段階までは把握できていた筈であると予測を立てられることの意味は大きい。そして、今まで「シュールリアリズム批判」で見てきたような階級問題が、この『カイロスとロゴス』の「魔力的なもの」の中でも言及が見られるということにも更に大きな意味を見出すことができる。これによって、デモーニッシュなものと、エッセイ中で見られた階級の問題が繋がりを持ったものだということが明白になっただろう。

　このティリッヒの、原始芸術に見られる創造と破壊の性格を持ったデモーニッシュな形式を資本主義社会に見る論理が、安部に大きな影響を与えていたことは間違いないと言える。安部はその影響から、この「シュールリアリズム批判」において原始芸術やデモーニッシュなものというシュルレアリスムと共通する語を用いて、資本主義社会における階級問題へと論理を展開していることが分かる。だが、エッセイ中でも何度も言及されている「原始芸術」は、階級問題とどのように関係するのだろうか。原始芸術についてはシュルレアリスム関連の文献やティリッヒの「魔力的なもの」に目を通しても、深く内容に迫るような言及を見ることはできない。そのデモーニッシュなものというものの核心部は、未だに明らかにされていないと言える。

　原始芸術とは、つまり原始社会の中で生み出される芸術のことを指していると見てよいだろう。その原始社会とは、あらゆる軋轢の存在しない社会だと想定される。社会・意識を掌る皮質第二系が未だ存在せず、階級問題も起こり得ない社会成立以前の社会において、原始人はその創作の源を何処に依ったのだろうか。ティリッヒは「魔力的なもの」の中で、「魔力的なものを最も強く表現する絵は、動物的な姿で以って精神が歪められた絵である。何となれば、そういう絵は創造的なものと破壊的なもの、精神的なものと精神以下のもの、と云う此の二重の

弁証法を其の中に含んでいるからである。」と、デモーニッシュなものを表現する最たるモチーフとして、動物などに代表される精神以下の存在を挙げている。ティリッヒの「魔力的なもの」に影響を受ける安部は、この引用に酷似する内容をエッセイ中で論じていることは先に述べたが、そのデモーニッシュなものの表現について言及していると思われる部分を、エッセイ本文中からもう一か所見ることができる。それはデフォルマシオンの節の、「その表出の持つ意味は刺激に対する本能的ともいうべき自己保存あるいは種族保存の衝動であり、場合によって下等動物の錯乱的な渦動状態に相当するものであったりまた擬死状態に相当するものであったりまた擬死態反射であったりする。」という動物や昆虫に見られる渦動や擬死を取り上げている部分である。安部は、それら動物や昆虫を、ティリッヒの言う精神以下の存在として挙げていると考えられるのである。

今までの論述から鑑みるに、精神とは社会性を代表とした皮質第二系を持った存在としての人間を指していると考えられるために、意識・皮質第二系と社会の成立を同時と考える安部にとっては、精神以下とは皮質第一系のみを有する無意識的・本能的・無条件反射的な動物や虫としても不自然は生じない。その中には、当然、社会成立以前に生きた人間である原始人も含まれるだろう。そして、プシコノイローゼによる表出運動の持つ意味を自己保存・種族保存の本能的な生への衝動と捉える安部は、デモーニッシュなものの根源として、生への衝動を考えていたのではないだろうか。それは、死への恐怖が前提となって成立する概念である。生と死の間にも、どちらか一方が存在しなければもう一方も存在し得ないという、創造と破壊の性格を持った二律背反的なデモーニッシュな形式を見出すことができるだろう。

viii

生と死の例と同じくして、二律背反の概念は、どちらか一方を規定した上で作られる対要素によって構成されるものだと考えられる。「シュールリアリズム批判」に読み取れる経済構造認識は、弁証法的唯物論の段階までは至っていないとしたが、安部は、資本主義社会という現段階での社会的現実を元にした上で規定される、理念としての共産主義の姿を捉えていたのではないだろうか。それは、デモーニッシュなものの節に見られる「モクロの神」（※13）の記述から読み取ることができる。モロクの神は、ティリッヒの「魔力的なもの」において、「生命を創造するために生命を貪り呑む所の土地の神への血の犠牲の中に、我々はあの人間を破滅させる所の経済の魔力的活動の原型を見る事が出来る。…（中略）…魔力的なものが宗教的な形をとつて活動する事に対する優れた象徴はモロクの神であつて、此の神は国家を救ふ為めには国家内の長子を貪り食ふ。」とあるように、その社会の長子を生贄にすることによって、混乱した社会は救うことができる存在として位置付けられている。生命の創造のために生命を犠牲にするという儀礼は、古くは『旧約聖書』にも見られる創造と破壊を同時に含む形式として知られている。そして、その形式を現代の社会に照応した場合に、創造と破壊の儀礼の象徴と言えるモロクの神は、人間の如何に

よって人間とその生活を創造も破壊もする資本主義社会という姿で現われているのだ、ということがこの引用部から読み取れる。上部構造と下部構造を含む資本主義社会の形態そのものを現代におけるモロク神と捉えた時、その生贄として捧げられる長子には労働によってその社会を構築している民衆・被抑圧階級が自ずと当て嵌まるだろう。それはまた、前述した通りシュルレアリストとも換言できるのである。そして、その長子である被抑圧階級を生贄にすることによって、混乱した社会は救われるのである。

だがそれは、より良い新たな社会を産み落とすという積極的な姿勢というよりは、資本主義社会の延命という消極的な意味として解釈すべきだろう。どれだけモロクの神に生贄を捧げ、創造と破壊を繰り返したとしても、その創造と破壊は形式に内包されたものであり、資本主義社会自体がモロク神である限りはその形式を超越することは不可能なのである。

ここで、デモーニッシュなものに対する二律背反的な存在を見ておく必要があるだろう。ティリッヒの「魔力的なもの」において、デモーニッシュなものの二律背反的な存在として「神的なもの」が挙げられる。そのことは、「宗教は、其の形式が明白に形造られていなければいない程益々その中に於て、魔力的なものと、反魔力的なもの即ち神的なものとの区別が出来なくなる。原始時代には、殆ど総ての事物や出来事や又多くの事物の諸部分さえもが神聖性を持っていると考えられているが、その神聖性は、そういうもの総てに対して神的であると同時に魔力的であると云う性質を与える。」という記述から読み取ることができる。この他にも、神についての言及は多く見られるが、その神の表現はキリスト教における神だけでなく、他宗教の神についても論じている。そのため、「魔力的なもの」における神は、一元的な神として捉えるべきであろう。

ティリッヒは「完全な解放と形式化が同時に為し遂げられたのは、古典時代（Klassik）が最高頂点に達した短い期間に於てであった。魔力的なものは消失し、神的なものと神によって充たされたものとが残った。神的なものは明白さと理想的形式と言ふ性質を得た。」と、神的なものが最も社会に現われた状態として古典時代を挙げている。古典時代とは、ギリシャ・ローマ文明に代表される、理性に象徴される時代を指す。十七世紀からヨーロッパで始まる古典主義は、そのギリシャ・ローマ時代に憧憬を抱き、理性・形式・調和・合理主義を尊重した社会を志す思想であった。また、古典主義の特徴としては、古典時代にユートピアを見出しているという点を挙げることができる。神的なものの象徴としての理性を、社会における経済活動に置き換えた場合、神的な経済活動とは、理性的な経済活動を意味する。その理性的な経済活動とは、共産主義社会を意味すると考えられるだろう。共産主義社会とは、階級が存在しない中で各個人が理性に則り、能力に応じた労働をすることによって成立する社会であり、それは換言すれば、各個人の理性を基軸とした社会となるのである。

古代ギリシャにおいて、理性はロゴスという語で表され、また同時にロゴスは論理や真理、合理という意味を持ち合わせるものでもあった。そのロゴス（理性）と対極をなすものとして、

反理性という言葉を挙げることができる。ここから、神的・理性的な経済活動としての共産主義社会と、デモーニッシュな・反理性的な経済活動としての資本主義社会という構図を導き出せるだろう。反理性というアミニズム的な概念は、ティリッヒの「魔力的なものを最も強く表現する絵は、動物的な姿で以って精神が歪められた絵である」という主張に見られる、デモーニッシュな形態を表現するための方法論としての動物などと共通する点を有しているだろう。先に、デモーニッシュなものの根源として論述した生への衝動も、理性が崩れた状態から齎される現象として捉えることができる。また、資本主義社会は、自由市場という経済システムにおいて利潤を追求する経済活動である。その利潤の追求とは、各個人の理性がデモーニッシュな力によって曇ることに帰依するものとして捉えることができるため、資本主義社会を反理性的な経済活動であると言い換えることもできるだろう。以上のことからも、理性的な共産主義社会と反理性的な資本主義社会という構図が成立すると言える。

安部は、「シュールリアリズム批判」の中で、「モクロの神に引裂かれることを恐れてはならない。また引裂かれてしまっている現実から眼をそらしてはいけない。」と主張している。現実がモロクの神に引裂かれている状態とは、資本主義社会であるモロクの神が、その社会におけるデモーニッシュなものの破壊の側面を見せていることになる。資本主義社会において、デモーニッシュなものの破壊の力が発揮することは、その社会における理性を曇らせることを意味するだろう。安部は、続けて「今では社会的現実である内的軋轢のデーモンに身を委せた以上、論理的な追及の手を一寸でもゆるめるや、われわれはたちまち錯乱的な渦動状態か擬死態発作の奈落に落ち沈んでしまうよりほかないのである。」と、反理性的な資本主義に乗じている現状に対して、階級問題の上に安寧して生活するのではなく、常に論理的・理性的に社会の改善を意識しなければならず、その意志を持たなくなった際には、擬死態発作を起す動物や昆虫と同等の、精神以下のデモーニッシュな存在にまで陥ってしまうだろう、と当時の資本主義社会への危惧を示唆している。安部は、プシコノイローゼ的な、生への衝動などの反理性的な反射としての社会改良ではなく、その意志を能動的に、理性を以って社会改良を加え続ける運動、それこそが本当のシュルレアリスムだと考えていたのではないだろうか。

社会的現実がプシコノイローゼ的である以上、人間の運動は全て反射なのであり、その反射は生への執着・欲求を根源としているのだ、という反理性的な地点で留まってしまっているのが現在のシュルレアリスムである。そこで留まることなく、常に理性的に社会改良を試み神的な理念としての共産主義を志す思想体系であることが、デモーニッシュ性を根本に持つシュルレアリスムの本来的な姿ではないのか。以上が、安部が導き出したシュルレアリスムから共産主義への移行の必然性であり、このエッセイで主張しようとした最大のシュルレアリスム批判であったのだろう。

結

（※1）
一九七二年『国文学』より。また、阪本龍夫氏は「安部公房論―安部公房とシュルレアリスム―」（『私学研修』一九八六年）において、作品中の「シュールリアリズム手法は、単なる形式的模倣」にすぎず、「安部公房が出会ったシュールリアリズム運動自身が、内容に浅薄さを持ち、敗戦という混乱期に醸成されたことによる脆弱さを内包していた」ことも影響して、「理解に限界と歪みとが生れた」としている。

（※2）
瀧口修造『近代芸術』一九三八年（昭和一三）、三笠書房より刊行。

（※3）
著：A・ブルトン　訳：生田耕作『アンドレ・ブルトン集成（5）』一九七〇年（昭和四五）、人文書院より刊行。引用は「シュルレアリスムとは何か」による。

（※4）
古林尚との対談「共同体幻想を否定する文学」《図書新聞》一九七二年一月一日号。

（※5）
『みづゑ』第五二五号　一九四九年八月（昭和二四）、美術出版社より刊行。水彩画家で美術論の論客でもあった大下藤次郎が一九〇五（明治三八）年に創刊した日本初の月刊美術専門誌。

（※6）
初出：「デンドロカカリヤ」『表現』八月号　一九四九年（昭和二四）八月。「シュールリアリズム批判」『みづゑ』第五二五号一九四九年（昭和二四）八月。「壁―S・カルマ氏の犯罪」『近代文学』二月号　一九五一年（昭和五一）二月。

（※7）
三浦岱栄（一九〇一‐一九九五）『神経病診断治療学』一九四三年（昭和一八）、鳳鳴堂より刊行。
「《一個の世界》」のような引用部は「フムケが喝破したごとく《芝居のポーズ》に他ならない。またフロイドのいう《疾病への逃避》の様々な現れにすぎない。」など、その他にも多数見られ、安部が多様な文献により見識を広げ、自らの論理を構築していたことがこの事実から理解できる。「フムケ」とはチェコの前衛写真家ヤロミール・フンケ（一八九六‐一九四五）のことか。この引用がどの文献に典拠するかは未だ断定できていないが、チェコという共産圏国であること、前衛写真家ということを鑑みれば、更に調査する必要があるだろう。フロイトの「《疾病への逃避》」については、アルス社から出版された安田徳太郎の翻訳による『精神分析入門（下）』一九二六年（大正一五）に同様の文言が見られる。
また、「シュールリアリズム初期に於けるブルトンの興味ある宣言文の一部を引用してみよう。」という前置きの後、「《この二つの現実は、現在の社会状態に於ては互いに矛盾し、そしてこの矛盾に於て吾々は人間の不幸やその運動の原因を見るのだが……。吾々はこの二つの現実を互いに対決させる仕事をあらゆる可能な機会に於て行わなければならない。どちらか一つ

を他に卓越させてはならず、また一つに対して、あるいはまた他に対して、二つが同時に働くことは不可である。何故かといえば、それらが現在あるより、より少なく離れてあることになると推定されるからだ……》」という引用と思われる個所が存在する。『アンドレ・ブルトン集成第5巻』、訳：生田耕作・田淵晋也（人文書院）に集録される「シュルレアリスムとは何か」というアンドレ・ブルトンの一九三四年初夏に行われたブラッセルにおける講演の中に、同内容の文言を見ることが出来る。『L、echange Surrealisme』、『近代芸術』内に、「シュルレアリスムとは何か」の部分的な翻訳は存在するが、安部がどの文献を元に該当箇所を引用したのかは、今の段階では断定できていない。だが、用いられた引用部と比較に用いた翻訳（初版一九七〇年四月）では、その大部分が一致を見せている。

（※8）

エッセイ引用部に見られるパウル・ティリッヒからの引用は、『カイロスとロゴス―歴史解釈の問題―』中の「魔力的なもの」に該当個所を見ることができる。

（※9）

著：フローロフ　訳：林髞『パヴロフ及其学派』一九三八年（昭和十三）、科学知識普及会より刊行。

（※10）

安部ねり『安部公房伝』二〇一一年（平成二二）、新潮社より刊行。

（※11）

著：パウル・ティリッヒ　訳：菅円吉『カイロスとロゴス―歴史解釈の問題―』一九四四年（昭和一九）、教文館より刊行。引用は第二編「魔力的なもの」による。

（※12）

以下、ティリッヒの論じる魔力的なものにおいても、引用部以外はデモーニッシュなものと記述する。

（※13）

正式にはモロクの神。子供を生贄にすることによって願いが叶うとされ、銅で模った像を祭った。牛の頭を持った姿は、正にティリッヒの「動物の如き形をした魔力的な働きをなす者の形態は、人間の形と或る関係を持ち、その形を通してそれは単なる動物的なものそのままの姿を超越せしめられる。」という主張と一致すると言える。

（本学修士課程二年）